
君は僕で僕は君.....じゃなくて！！

春狼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君は僕で僕は君……じゃなくて!!

【Nコード】

N5629W

【作者名】

春狼

【あらすじ】

ある日の登校中、教師から盗んだバイクで走り出しちゃった女の子、桐野水哉に轢き逃げされた俺、白那翔。

うつかりして身体は植物状態、意識は水哉の中なんてトンデモ状態になっちゃったもんで、死んでんのか生きてんのか…。

…とにかく、俺の平々凡々ライフを返せ!!!!!!

・プロローグ・ 教師から盗んだバイクで走り出しちゃった女の子!?

平々凡々な毎日。ごくありふれたちよつとバカな高校生。それが俺。
…あ、訂正。すつげえバカかも。

それはともあれ。

「…あ、そっぴやお前、知ってるか？」

事件(?)の発端はごくありふれた会話から始まった。

「ここらのお嬢様学校で、教師から盗んだバイクで走り出しちゃった女の子が…」

そこで、世界が反転した。どつかの骨がイツちゃったらしく、バキバキと音がした。身体中を激痛が…とかなんとかで、俺の意識はぶつ飛んだ。唯一覚えているのは、ハーレーに乗る、お嬢様学校の生徒が見えたような。

「あー…いつてー…」

真っ白な空間。白以外の色を見つけられない。

「えーつと…ここどこ？」

「私の意識の中だ」

凜とした声。

「んあ!!?」

「……君は馬鹿か?日本語を話してくれ。その他の言語を理解することすら面倒だ。出来ないなら一生黙っていてくれ。頼む」

皮肉混じりの口調。

「って誰よ？」

「君が先に名乗るのが礼儀だろう?」

ちよつとムカつく。

「あ…えつと、すみません。俺はし……」

「まあ仕方あるまい。私が名乗ってやろうではないか。」

あ、ヤバイ。爆発寸前。

「クソうぜええええ！！！！！！！！！！」

……爆発。

「五月蠅い」

「ごめんなさい」

彼女は桐野水哉^{キリノ・ミカ}という名前らしく、俺を轢き逃げした張本人だそうな。

「ふむ…白那翔^{シロナ・ツバサ}……なんとも安上がりな名だ…」

と、俺の名前を散々罵倒した挙げ句、俺を奴隷扱いするお嬢様もとい女王様な奴。

彼女の話を知ると、俺の身体は植物状態で、彼女のただっ広い豪邸（彼女いわく狭い別荘）のベットルームに安置されているらしい。しかも、専属の医者付きで。そこまでしなくても…と思って彼女に言ったところ、大人の事情だと言って誤魔化されてしまった。

「安心しろ。悪いようにはしないぞ？」

そう彼女は言った。悪人の如き黒い笑みを顔に浮かべながら。

とにかく俺は、しばらくは水哉の意識の中に居候することになった。

・ブローグ・ 教師から盗んだバイクで走り出しちゃった女の子!?(後書き

はじめましての人も、他の小説を読んでくださった人も、こんばんは。

『君は僕で僕は君……じゃなくて!!』を読んいただき、ありがとうございます。

今回は、長めです。

えー、短いのがいいーっ!!て人、ごめんなさい。

それではまた。

『君は僕で僕は君……じゃなくて!!』か『殺せない殺戮兵器』で。

・第一章・ 今から君は…

真っ白な空間……だった水哉の意識の中は、俺が寝てる間に色々
と変化があった。とりあえず、箇条書きにしてみよう。

- ・超巨大な豪邸が建設されたこと
- ・中が超豪華絢爛なこと
- ・高級品っぱいのばつがあること

さすが水哉の意識の中。ものすごいお城が一夜で完成しちゃった。

「おはようございます、お坊っちゃま」

箇条書きにもう一個追加。

- ・すっげえ執事な人がいること。

「あ……おはようございます……」

情けない……。声が段々小さくデクレッシェンドだ……。

執事な人はにっこり笑って、

「お食事の用意が済んでおりますので。どうぞこちらへ」

そして俺は、超巨大なテーブルに通されたのだった。

「ご馳走さまでしたっ！！」

「お気に召されましたか？」

お気に召すも何も、こんなスバラシイ料理、お気に召さない奴が
いるわけな……

「不味かったぞ。牛の質が落ちたな……世界中を駆けずり回って、最

高に美味しい肉を探せ」

いた。ここに一人。桐野水哉っつー超お嬢様もとい女王様。

「かしこまりました」

さすがは執事な人。表情ひとつ変えず、笑顔で応対した。

「っつーかなんでお前いるの!!!?」

「君、馬鹿だな。」

いきなりそれが。

「ああ!?!」

「口を慎め」

一般ピープルな俺に、執事な人みたいな対応なんて出来るわけね

ーじゃん!!!!

「…すいませんでした。」

「うむ、それで良い」

なんだか満足げだ。そんなに人を貶めたいのか。

「で、だ。私が直々に先ほどの質問に応答してやろう。感謝しろ」

あーム力つく。何も言わなきゃ超美人なのに…。

「……………」

あれ…答えてくれるんじゃないの？

「私に感謝しろっ」

あ、そういう事ね。

「ありがとうございます」

「うむ、苦しゅうないぞ」

なんかすっげえご満悦な様子で。単純なところがまた可愛い。…

で、答えは？

「私が私の意識の中にいて何が悪い」

……ダメだこりゃ。俺様モードならぬ私様モードだ。こんな奴に聞いたって無意味だ。一生まともな答えとか返ってこないに決まってる。だってこいつ、デンパっぽいもん。

「ぼさっとするな。シャワールームとジャグジーの用意をしろ。炭酸泉の水でな」

なんつートンデモ発言。炭酸泉の水って、けっこう高級品じゃなかったっけ。それをシャワーやらジャグジーやらに…っつーかジャグジーってオイ！…！すっげえセレブ生活じゃんか！…！

「君に言っているんだ。さっさと働け」

長くて綺麗な指で差された俺は、しどろもどろ。

「え、あ…俺！？」

「そうだ。今日から君は、客人兼働き蜂…もとい、私の護衛になつてもらうぞ」

ふざけんな。なんで俺がお前の働き蜂やんなきゃなんねーんだよ。

「はあ！？テメーブツ殺…」

「口を慎め」

「…っ！…」

「ん？」

「……はい……」

こうして、俺らの主従関係的なものが出来上がった。

・第一章・ 从今天から君は…（後書き）

どうも、こんにちは。

ブログを読んでくださった人が多くて、びっくりです。

第一章を読んでいただき、ありがとうございます。
感謝感謝です。

・第二章・ イン・ザ・ジャグジー、イン・ザ・ヘッド!?

「つはあ…なんで俺があいつ作の豪邸でジャグジーの準備してんだ？」

「おい、君。準備は出来ているんだろっな？」

「あ、ヤバイ。女王様が来た。」

「…誰が女王様だと？」

「げ。こいつ、俺の心も読めるのかよ。」

「当たり前だろう？」

「ってオイ。なんでだよ。」

「私が私の意識の中で……」

「またそれかよ!!!？」

「さっき聞いたばかりだったの!!!」

「私が私の意識の中の者の心を操って何が悪い」

「あれ…さつきと微妙に違う……」

すると水哉は、虫を見るような冷たい目で俺を見た。

「君は馬鹿か？」

出た。礼の口癖。

「……まあいい。面倒だしな。そんな事よりジャグジーだ。私はあの薄汚い学校へ行かなくてはならない。その前に身体を洗い流さねば私の一日は始まれぬのだ」

あれ？綺麗にしたのにまた汚れるんだ？

「早くしろ。停学届を受け取りに行く」

「停学!!!？」

「こんなにも容姿端麗で成績優秀な奴が!!!？」

「ハーレーを借りたまま返さなかっただけなのにな。可笑しな話ではないか」

「お前、バカだろ!!!」

無免許でハーレーを運転して、しかも俺を轢き逃げして、さらにそのハーレーを借りパクかよ!!!？

「口を慎め。私だから許されるのだ」

……ダメだこいつ。

「準備も出来たようだしな…入るぞ」

とか言つて普通に全裸で入つて来ちゃつた水哉。

「のわつつ！……！！」

それを見ちやつた俺。

「ん？どうした？」

平然としている水哉。

「え、あ、いや…その…あの……」

ヤバイ。顔すつげえ火照つてる。

「全く…朝っぱらから不謹慎だぞ？それとも私と夜の付き合いをしたいのか？ん？」

「いやいやいやいや！！！！そんなワケじゃなくてだな！！！！！！！！！！」

くつくつく、と水哉が笑つた。

「やはり最近の若人は盛んだな」

俺、絶対弄ばれてる…。

というわけで、ジャグジーに入つてご満悦な女王様の身体を俺は拭く事になつちまつたのですが。どうすりゃいいんだよこれ。

「えーと…水哉……俺、こんな事しちゃつていいの…？」

「何をへこたれているのだ。やはり若人は血気盛んでなければな」

「ですよー…」

あー…ヤバイ。心臓が破裂しそう。死んじやうつてこれ！！

「君、そんなに興奮してるのか？」

「うるせー」

とか言いつつも興奮しまくりだから！！！！スタイル抜群で、しかも、上も下も見えてるし…っ！！

「君、変態だな。流石は発情期……」

発情期ってオイ。人間の男は常日頃から発情期なんだぞ。期もクソもねーんだよ。

「どうもすいませんねー」

「よし、終了!!」

なんとか水哉の身体を拭き終わった俺は、今までに感じた事のな
い程の達成感を感じていた。

「うむ、ご苦労であつたぞ。…では、私に接吻をしろ」

………は？

「私に接吻をしろっ」

え、ちよつと待った。接吻ってつまりあれだよな？あの、あれ。

「………私にキスしろっ!!」

ああ、そうそう。それ……

「ってオイ!!？なぜにイキナリそんな展開に!!？」

「そ、その……私が君に……あの……好意を抱いているとか……その……
…そういう事じゃなくてだな……えつと………」

あーっ!!もうなんだこれ!!？水哉のクセにカワイイじゃん
か!!!なんだよこれ!!!あークソ!!!なんかドキドキしちゃ
うじゃんか!!!

「と、とにかく!!これはそういうんじゃないからなっ!!」

…なるほど、これがあのツンデレというヤツか。なかなか可愛
さるじゃないか。

「私があちら側に戻るために必要っただけなんだからな!!」

ああ、なるほど。

「だから、私をベッドに寝かせた状態でキスしろ。良いな？」

え、ちよつと待った。それってやつちやいけないんじゃないか。

「あくまでキスだけだからな!!？」

「……はい」

- 第二章 - イン・ザ・ジャグジー、イン・ザ・ベッド!?(後書き)

はい、なんか見事に方向がオカシクなりましたね。
ごめんなさい。

あ、でもまああれですから。

あれがあれだからまだあれなんです!!

それではまた。

次話が『殺せない殺戮兵器』で。

・第三章・ 女王様は登校中に御座います。

音も震動も伝える事なく走る高級外車は、外の景色を見ていなければ動いていないようにすら感じる。それだけでも、物凄い車だという事は充分伝わってくる。

「…これが普通ではないのか？」

お嬢様。感覚が大幅にズレていらっしやるようで。

それはともかく、なんで俺らの会話が普通に成立しているのかというところ……

……それはほんの数十分間前、水哉の意識の中での出来事。

「私にキスをしろっ……！」

とか言い寄られちゃって。出会ってまだ一日だよな？とか聞いたら実は三日経ってて、え、でもそれでもそんな事できるわけないじゃん！？もちろんケンカしまくりですよ。ベットの上で。

まあ、水哉が意識の中から出て、俺と水哉の肉体と精神をリンクさせるためだったりするんだけど。

そんなワケですね……しましたよ。キス。唇とかすっげえ柔らかくて。ビックリですよもう。……えへへ……キスしちゃった……。

「このド変態がっ……！！！」

……そうか、水哉とは以心伝心が可能なんだっけ。すいませんでした。

「全く……けしからんぞ。私とキスをしたからって、君と付き合う訳ではないのだからな」

…ごもつともです。

「…それに、あれだからな。私は君の事を…その…好いている訳ではない……からな…？」

なんつー分かりやすさ。

「君の事は嫌いなんだからな！！！！」

……カワイイなオイ。

「五月蠅いっ！！！！」

「実は可愛かったりするんだな…」

「こっ……声に出すんじゃないっ！！！！！！」

そんな事言われたら虐めたくなるじゃないか。

……もしかしてあれ、初キスだったのかな？

「う、五月蠅い！！！！馬鹿は馬鹿らしくしている！！！！」

ふーん、凶星か。

「つ、着いたようだぞ。さつさと行こう」

おお、ここがあ「こつりゅうじょがくいん」の有名な紅龍女学院。流石、由緒正しい学院だな。エントランスやらメインホールやら、普通じゃあり得ない規模の学院だ。ホテルと見紛う綺麗さ。

「きやああっ！！水哉様だわ！！！！」

……はい？

「水哉様がいらっしやいましたわ！！！！」

「水哉様！！！！」

「ああもう私幸せですわ…死んじやいそう……」

そう言って俺らに近寄って来る大勢の女子。

「おお、相変わらずだな。出迎えご苦労であつた。ありがとう」

平然と応え、彼女らに笑顔を向ける水哉。

「きやああああああああっ！！！！」

黄色い歓声があがる。そんなに素敵すぎる笑顔なら見てみたいものだが、今は一心同体な為に見られない。残念すぎる。

「……さて、行くか」

そして俺らは院長室へと向かった。

・第三章・ 女王様は登校中に御座います。(後書き)

ごめんなさい。すいません。本当にごめんなさい。

なんでこんな方向に行っちゃったんでしょう。

なんかキヤラが動いちゃったんです。

……もう知るかあああ……！！！！

行くとこまで行っただれ！！！！！！

ちょこつと変更点があります。

さして変わってませんが…。

・第四章・ …… ってただのガキじゃんっ！！！！

コンコン、とドアを叩く。

「失礼する」

あれ、そんな態度なの？相手は院長だぞ！？お偉いさんだぞ！！？
「どうぞー」

なんか普通に流してるけど。ってあれ…院長は？

「話は聞いたぞ。私を停学にするそうだが？」

「そうそう。そうなんだよねー…で、どうよ？停学にしちゃっていいかなあ？」

え、ちよつと待て。なんでこんなちつこいの院長！？

「ま、テキストに休んどいてちよーだい、いろんなトコに根回ししてあるから心配ないさーっ」

それっぽい椅子に座ってる院長はそう言った…… ってただのガキじゃん！！！！よくよく見たら…っつかよくよく見なくてもただのガキじゃん！！！！！！！！

「院長に向かって失礼だぞ、馬鹿め」

これ院長かよ！！！！？

「こんなクソガキでも院長にかわりはない。一応、念のため敬つとけ」

なんとまあ失礼極まりない…。

「全く…これだから水哉ちゃんは手に負えないんだよねえ。ほんでもって、今回ののはどこのどちらさんなのかなー？」

「白那翔。どつかのノラ高校生だ」

誰がノラ高校生だコラ。っつか今、なんかオカシイ会話してなかったか？

「そつかそつか…大変だねえ。その子が哀れだよー」
とか言って、もうなんかヘラヘラ笑ってて。

「白那クン、頑張ってちょ」

なんでそうなったああああああああああ！！！！！！！！！！

!!

「そんじゃ、とりあえず停学2ヶ月っ！ー！ばいにやらーっ♪」

……何なんだよこの学院は！！！！！！

・第四章・……………つてただのガキじゃんっ！！！！（後書き）

ブランクができてしまい、すいませんでした。
どうも暑さにやられてしまったらしく…。

まだまだ暑いので、油断大敵ですね。
実感しました。

さて、今回は院長先生が登場しましたが…ガキンちですよ。
リアルガキ。

まあきつとそこには大人の事情が…とかね。
色々あったんですよ。はい。

・第五章・ 俺、何気にファンだったんだけど

さてとー……あの窮屈な学院からは脱出したわけだし、とりあえず寝ますかつー！

「おい、君。私を差し置いて寝ようとはなんとという失態だ？」

水哉女王様。いい加減に寝させろやコノヤロー。

「女王様……それはどういう意味だ。私は女王ではないのだから？」

あれ、コノヤローって方には反応しないんだ。……ま、いつか。

俺らは現在、だだっ広い学院のキャンパスを歩いている。そこかしばらく歩けば駐車場に着くらしいが、いっこうに着かないのが現状だ。水哉の言う『しばらく』が信用ならない。

「……着いたぞ」

水哉がそう言ったのは、それから十分程経った後だった。……つて広くね！？これ駐車場かよー！！？

「ん？駐車場とはこういうものを指すのではないのか？」

こいつの価値観、オカシインじゃないか？だってこの駐車場、だだっ広いどころか彫刻とか噴水とかがあるし。宮廷とかにありそうな庭園に見えるし。

「庭園？庭がこんなにちんけな訳があるまい」

……ダメだこいつ。

「……まあいい。確かに一般的な価値観というのは……私には理解できないしな」

そう言った彼女の言葉は、いつもより歯切れの悪く聞こえた。平凡な暮らしより、彼女のような暮らしの方が良いに決まっているのに。

「うわっ……！？」

水哉が珍しく声を上げた時、突然、俺らの視界がブレた。

「貴様、何をするっ！！！」

必死で足掻くが、温室育ちのお嬢様が相手の力に敵う訳もない。

「チッ……。おい、翔！！私と代われ！！！！！」

初めて名前で呼ばれた！！？

「早くっ！！！！！」

っはい！！！！！！

「……柔道三段&空手二段の腕、ナメんなよな……！！！」

とにかく、相手から逃れる事が先決だぞ。それが賢明のようだしな。このような時、殆どの場合には仲間がいるだろう。

「はいはい……。ま、戦う場じゃ基本だしな。自分より相手が強いと見定めたら迷わず逃げるべし……と。んじゃ……いくぜっ！！！」

身体が軽い。胸がある分重心がいつもと違う。難しい。

「っらあ！！！！！！！」

よし、抜けたっ！！蹴り一発でKOとは……流石だな。

「おっしやあっ！！さっさと逃げるぜ！！！」

車か何かで追ってくるやも知れん。山に逃げるぞ。

「おう！！……ってあれ？なんで俺が走ってんの？」

当然の事だろう？何故に疑問にもつ必要がある？

「いやいやいやいや……普通疑問にもつよな？」

君はそれが役目だろう？

「あ、そっか……じゃねえよ！！！！！！！」

とか言っている……ほら、聞こえるだろう？このエンジン音。

振り向くと、そこには数台の車があった。どれも黒塗りで、ナンバープレートが剥がされている。

「ってこれ、あからさまにヤバくねえか！！？」

だろうな。恐らく、私を人質にして身代金を要求しようとしてもい

うのだらうな。

「なるほど……。つつーかお前さ、走んねえならナレーションやれよ。読者さんらが困るだろ？なにやってんのこいつらー？とか呟いてんだろうしさ…な？」

何故私がそんなことをせねばならない？第一、今逃げているという現状に変わりはないのだぞ？それに、きつと彼等も分かるだろう？この状況は逃げている以外の何物でもない、とな。もっとも、君のような馬鹿には理解し得ないだろうがな。ついでに言つと、こんな小説を読もうというのは相当の暇人だけだろうしな。

「うわ、なんだその毒舌のオンパレード……。俺どころか読者さんにも飛び火してんぞ？つつーか作者も含めて被害被ってんだぞ！？」
五月蠅いな、君。君への飛び火はどうでも良いだろう？

「お前の機関銃並みな毒舌攻撃よりマシだろ。それにどうでも良くねえよ」

……………。
「あれ？なんで沈黙？」

……………くう……………。

「つて寝てるんかいっ！！！」

……………うあ……………？うー……………あー……………私の安眠を妨害するにやあ……………。

「……………寝ぼけてる……………」

山……………着いたら知らせて……………私の隠れ家……………案内する……………。

「分かったけど……………もう着いたぜ？」

う……………？

「山に着いたんだけど？」

むー……………山……………？

「うん、山」

……………？なんで山にいるの……………？

「……………大丈夫か？」

……………もうちょっと寝るの……………。

「……………うんそっか」

うん、おやすみ……………」

「つてのは困るんだよ馬鹿!!!!!!!!!!!!!!」

……………あ?…ああ、なんだ……………君か。

「目、覚めたか?」

ああ……………最近、寝ていなかったものでな。君のいる場を創るのに、無駄に時間が掛かってしまった。

「そっか……………ありがとな」

だから、せいぜい私に尽くすんだな。

「うーん……………それはちよいお断りかもな」

で、だ。この山道を真っ直ぐ進んでくれ。

「真っ直ぐな……………」

そこを左……………じゃない、右。

「右……………」

……………そこの左……………!!

「左……………!!」

痛い……………!!?

「あ、ごめん……………樹にぶち当たっちゃってさ」

……………おお。これだ、これ。

「確かに、梯子みたいなロープあるな……………」

それを伝って登れ。上にツリーハウスがある。

「……………それってあれじゃね?マ。ツクツリーハウスのな?映画化したあれじゃん。俺、何気にファンだったんだけど」

そうか。では実体験してこい。

「おう……………!!なんかヤル気出てきたぜ!!!!!!!!!!」

・第五章・ 俺、何気にファンだったんだけど（後書き）

この時間に投稿：私的には珍しいんですが、不健康なのは良くないですね。ちよつと反省。

早寝早起き。これ何気に大事ですよ！！

というわけで、今回も読んでくださった方や初めましての方、ありがとうございました！！！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5629w/>

君は僕で僕は君.....じゃなくて！！

2011年9月26日03時24分発行